

これがあればできる！障害のある個人による「できる」の拡大

I can do that with this support! : Enhancing the information on behaviors maintained
with positive reinforcement by the people with disabilities.

○吉尾玲美, 鳥取直子, 高山仁志, 中鹿直樹

Yoshio Reimi, Tottori Naoko, Takayama Hitoshi, Nakashika Naoki

あぜくら福祉会

Azekura Welfare Association

Key words: behavioral QOL, student job coach, active simulation

目的

行動的QOL(望月,2001)とは、個人と環境の相互作用に焦点を当て、正の強化で維持される行動の選択肢を数えることにより生活の質を定量的に測定する指標である。

学生ジョブコーチ(以下SJC)は、障害のある個人の行動的QOLの拡大の一環として、「これがあればできる」という対象者の行動成立に必要な環境設定を発見・シミュレーションするため、模擬喫茶店舗における実習支援、および当事者の周囲への情報移行を行ってきた。

SJCにおける実習は、対象者に一定の訓練を施し既存の職場環境への適応を期待するのではなく、職場環境を柔軟に変化させることで行動成立に必要な援助設定を新たに見つけるためのアクティヴ・シミュレーション(望月・野崎, 1998)の場である。

本研究における実践では、従来SJCが中心的に担ってきた関係者に対する情報移行の作業に、当事者を大きく関与させることを試みた。実習においてSJCは、正の強化を目的としたフィードバックを行うことで、当事者の「できる」に関する言語行動が拡大するかを検討した。

方法

場所 実習期間にのみ営業する立命館大学の構内に存在する模擬喫茶店舗 Café Rits であった。

期間 201X年11月Y日～11月Y+4日の計5日間であった。

対象者 対象者として実習に参加したのは、特別支援学校高等部2年の男子生徒1名(以下A君)であった。

実習の1日のスケジュール 午前と午後の営業時間中に実習生は喫茶店業務に取り組んだ。各営業時間後には振り返りを行った。

手続き SJCによる課題分析に基づき作成した厨房・接客業務の手順書を実習生に渡して仕事をしよう求めた。SJCは業務中に実習生の行動に先立つ指示を極力控え、実習生の行動が自発するのを待った。そして手順書に記載されていない好ましい新奇な行動が見られた場合には、即時的にカードを手渡し、その行動がもたらし得る好ましい結果を説明しながら賞賛した。また振り返り場面では、振り返りシートの記入およびその日の実習生の行動

について「状況」「反応」「結果」という三要素を満たす行動の報告を求めた。尚振り返りの際、テーブル上にその日実習生が受け取ったカードとiPadを置いておいた。

結果

実習1-2日目には、実習生は仕事場面でSJCから賞賛とともにカードを受け取っても戸惑った表情を見せ、振り返り場面でも「なにをしましたか」「どんなときでしたか」「それをしたらどうなりましたか」というSJCからの問い掛けに対して黙り込んだ。

そこで実習3日目からは、SJCはカードを渡す際の言語表現を簡潔にし、大喜びしながら賞賛するようにした。また振り返りにおいては、行動の三要素を満たす報告を聞き出すための形式的な問い掛けを控え、その日の仕事に関する発言が出た場合に、仕事場合同様に賞賛した。すると、実習2日目午前の時点では頭打ちとなっていた新奇な「できる」の言語報告数が、実習3日目以降から増加した。また仕事場面では、手順書に記載されていないが仕事に適応的で新奇な行動の生起数が上昇し続けた。

さらに、実習生は振り返り時にテーブル上にあったカードを並べて数えるという行動を自発し、日毎のカードの獲得数を比較するという行動も示した。

考察

当事者の「できる」に関する言語行動を引き出すためには、正の強化を目的とした支援を行うことが重要である。相手の好ましい行動の自発を根気よく待ち、そして好ましい行動が示されたときには、その行動を早急にほめるのである。

本実践における実習生のカードを数えるという行為は、SJCが予想していなかった、実習生の創発的な方法による「できる」の報告である。これは多様な行動によって正の強化を得られる環境下であったからこそ生じた当事者自身による行動的QOLの拡大であったといえよう。

引用文献

望月 昭(2001). 行動的QOL:「行動的健康」へのプロアクティブな援助 行動医学研究 6, 8-17.

望月 昭・野崎和子(1998). 学習したことばを、どう一般化させるか 実践障害児教育, 304, 50-53.